次の文章は『宇津保物語』の一節で、仲忠の母が帝の御前で琴の腕前を披露し、内侍(ないし)の督(かみ)に任ぜられた直後の場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

主上(うへ)、いかでこの内侍の督御覧ぜむとおぼすに、御殿油(おほとなぶら)ア ものあらはにともせばものし。イ いかにせましとおもほしおはしますに、蛍、おはします御前わたりに、三、四つれてとびありく。主上、「これが光に物は見えぬべかめり」とおぼして、立ち走りて、皆捕へて御袖につつみて御覧ずるに、ウ あまたあらむはよかりぬべければ、やがて、「童べや候ふ。蛍少し求めよや。エ かの文思ひ出でむ」と仰せらる。殿上童べ、夜更けぬれば、候はぬうちにも、仲忠の朝臣は承りうる心ありて、水のほとり草のわたりにありきて、多くの蛍を捕へて、朝服の袖につつみて持て参りて、暗き所に立ちて、この蛍をつつみながらうそぶくときに、主上いととく御覧じつけて、直衣の御袖にうつしとりて、つつみかくして持て参り給ひて、内侍の督の候ひ給ふ几帳のかたびらをうちかけ給ひて、物などのたまふに、かの内侍の督の程近きにこの蛍をさし寄せて、つつみながらうそぶき給へば、さるうすものの御直衣にそこらつつまれたれば、残るところなく見ゆるときに、内侍の督、「あやしのわざや」とうち笑ひて、かく聞こゆ、

衣うすみ袖のうらより見ゆる火は満つ潮垂るる海女(あま)やすむらむ

と聞こえ給ふさま、オ めでたき人のものなど言ひ出だしたる、さらなり。し出だしたる才(ざえ)など、はたいとめでたく、カ 心にくき人のそのかたち、はた世に類なく、いみじき人のさるらうあるものの光に、ほのかに見ゆるは、ましていとなむせちなりける。主上御覧ずるに、たとふべき人なく、めでたく御覧ずること限りなし。かくて、いらへ給ふ。

キ 潮垂れて年も経にける袖のうらはほのかに見るぞかけてうれしき

〔注〕○主上――帝を指す。
○内侍の督――内侍所の長官。天皇の周辺にいて諸事をつかさどる女官。
○朝服――貴族の男子の正装。ここでは、その時の上着にあたる「袍（ほう）」。
○うそぶく――息を吹きかけること。
○かたびら――几帳に垂らしてある布。
○うすもの――夏向きの薄手の衣服。
○し出だしたる才――ここでは内侍の督が披露した琴の才芸を指す。

設問

(一) 傍線部ア・イ・カを現代語訳せよ。

(二) 「あまたあらむはよかりぬべければ」（傍線部ウ）を、具体的な内容がよくわかるように現代語訳せよ。

(三) 「かの文思ひ出でむ」（傍線部エ）とあるが、「かの文」とはどんな内容の「文」と考えられるか、簡潔に説明せよ。

(四) 「めでたき人のものなど言ひ出だしたる、さらなり」（傍線部オ）を、必要な言葉を補って現代語訳せよ。

(五) 「潮垂れて年も経にける」（傍線部キ）とは、誰のどのような心情を述べたものか、わかりやすく説明せよ。